

# 第1回

## 新宿区次世代育成協議会部会

平成23年8月4日（木）

新宿区子ども家庭部子ども家庭課

## 1 開会

### ○福富部会長

開会挨拶

## 2 第四期新宿区次世代育成協議会部会員自己紹介

<名前と所属、簡単に部会への抱負など自己紹介を行なった。>

## 3 新宿区で生活する若者の概況について

### ○福富部会長

今年度のテーマですけれども、昨年度、部会としてのまとめをしまして、非常に大きな枠組みの中で、若者に対する支援の留意点みたいな形でまとめをさせていただきました。

その際にも、どこまでが若者か、最初いろいろ議論がございました。国で若者に対して自治体に期待するものの中で、30代までが若者だということです。30代後半も、ターゲットに入れよう。これは、次世代育成協議会の前身、前は青少年の問題を扱っていた。新宿区では、青少年問題と乳幼児期の問題を分けるのではなくて、次の世代を担って活躍していただく人として育成するという視点が必要だとして、現在の協議会となった。ですから委員の方も青少年団体の方もいけば、乳幼児期にかかわる団体の方もいらっしゃる。

でも、恐らく青少年団体の人々がターゲットとしている青少年は、どうでしょう、30代後半までは恐らくターゲットになかったんだろうと推測します。

### ○委員

そうですね、そのとおりです。

### ○福富部会長

せいぜい小学校高学年ぐらいからと、それから中学生、高校生、そして大学生ぐらいです。大学生は、むしろリーダーとして参加してもらいたい形だろうと思います。そういうターゲットで考えてきたのですが、ここ数年、国レベルで、いわゆるひきこもりの若者たちという形で、問題が提起されることになってきております。区としても、そういった若者に対して何らかの支援ができないだろうか、その視点を考えていこうということで、去年1年間、考えてまいりました。今年は、その上積みというか、もう少し具体的な提言がなされたらと思います。

そこで早速、事務局に新宿の若者の現状というか、概況という資料を作っていただきました。それについて事務局から御説明願えると、少し新宿の若者の実情が見えてくるんじゃないかと思います。では、よろしく願いいたします。

## ○事務局

それでは、次第3番の新宿区で生活する若者の概況について御説明をしたいと思います。お手元にある、資料1をごらんください。

表紙を、おめくりいただいて、新宿区の年齢別人口構成ということで、30歳から39歳が全体の18.9%、20歳から29歳が点線の部分ですけれども、これが全体の15.6%。両方合わせると34.5%ですか、20歳から39歳までの年齢層が大変多いということが言えます。

3ページ目ですけれども、今度は世帯人員の状況です。1人世帯が全世帯数の63%を占めています。その中でも20歳から29歳、それから30歳から39歳で1人世帯の方が圧倒的に多いということです。2人世帯になりますと、50代以降、40代以降も同じぐらいの数で、60代以降になると、もっと多いという形になります。3人世帯になれば、40代から多いという形になります。

ちなみに、0歳から9歳で1人世帯って何だろうということなんですけれども、これは外国の親御さんをお持ちで、日本で生まれになり日本国籍を取得した乳幼児の方の場合は、日本人であるお子さんを世帯主とせざるを得ないので、こういう世帯があるということでございます。これは何だという話になろうと思いますので、事前に報告しておきます。

次、4ページをごらんいただくと、ひきこもりの推計数です。内閣府の調査によると、広義のひきこもりは有効回収数の1.79%で、69.6万人と推計されています。これを新宿区に当てはめると15から39歳、約10万6,000人のうち約1,900人が広義のひきこもりと推計されます。

下のさらに細かいところを見ていただくと、引きこもりの状況として、「ふだんは家にいるが、近所のコンビニなどには出かける」、「自室からは出るが家からは出ない」、「自室からほとんど出ない」に該当した者を狭義のひきこもりと定義し、「ふだんは家にいるが、自分の趣味に関する用事の時だけ外出する」に該当した者を準ひきこもりと定義したところ、推計数はそれぞれ23.6万人、46万人となった。さらに、狭義のひきこもりと準ひきこもりを合わせて広義のひきこもりとしたところ69.6万人となったということです。本当に自分の部屋から出ない、家から出ないという方がこれだけ多くいらっしゃるということです。

続いて5ページ目を見ていただくと、自殺者数の増減で、全国と東京都と新宿区の比較が出ております。新宿区における自殺者数は平成18年が65人、19年にいくと79人、20年は79人

ということで、一たん上がって、そのまま横ばいの状況です。全国、東京都においては減少傾向が見られますが、新宿区では横ばい状態となっています。

次のページ、新宿区における自殺者数を年代別に見ると30歳代が合計55人、24.7%を占め、20歳代が41人で18.4%と、他の年代よりも多く、各年別に見ると30歳代の自殺者が年々増加傾向を示しています。

続いて、生活における心配ごとをアンケート調査した結果が出ております。10歳代、20歳代、30歳代に、生活における心配事で今心配であることを聞いたところ、「近所づきあいの中でいざというときに相談できる人がいない」というお答えが最も多くなりました。生活における心配事の上位5つを挙げた新宿区民意識調査ですけれども、左のほうは10歳代・20歳代ということで、やはり相談できる人がいなというのが1番、30歳代にも同じようにその方が多いです。両方とも3割弱です。その次は、「暮らしに十分な収入が確保できない」で、10代、20代でいうと「就職先が見つからない」、4番目が「健康のことが心配」という形になっていまして、30代のほうは1、2は一緒ですけれども、3位と4位が逆転して、3番目に「自分の心身の健康が損なわれる」、それから「就職先が見つからない」という順番になっています。それと、「リストラなどで解雇される、または廃業する」のではないかとということが心配事で挙がっています。いずれにせよ、10歳代・20歳代、30歳代とも「いざというときに近所に相談できる人がいない」が最も高い結果となりました。

続いて、8ページにいらっしゃると、ライフステージにおける困難を抱える若者への支援及び予防的対応です。

真ん中のところの矢印的な形で右のほうに伸びていっていますが、左から出産前から始まって、右の世帯形成期に向かって、上側が新宿区の若者への支援、下側に予防的対応という形で整理させていただきました。上段の若者への支援については、右のほうに、若年非就業者支援、悩みごと相談室・若者応援講座、心身の健康といった、括弧に書いてある部のほうが所管して取り組んでおります。また、下側の予防策については、教育委員会で言いますと、幼稚園が始まる3、4歳頃から中学を卒業した青年期ぐらいまで教育相談室、つくし教室、スクールカウンセラーといったような対応で、教育のほうで予防的対応をしております。将来、ひきこもりの若者にならないようにということも視野に入れながら、取り組んでいます。

子ども家庭部としては、真ん中の段で、次世代育成支援・子どもと家庭の総合相談ということで、まさに生まれる前から、世帯形成期までずっと通してかかわっております。最後の健康部におきましても、心身の健康面という切り口で、やはり出生前から世帯形成期以降ま

ですと健康面でのかわりをもっているという形です。

次、9ページにいらっしゃると、平成22年度部会の指摘事項で、先ほど福富部会長からお話がありましたように、昨年、地域における若者への支援策を探るということで、部会活動のまとめを大変丁寧にやっていただきました。その指摘事項の1番として、若者の現状及び既存支援事業についての広報啓発の充実・強化ということで、本日第1回目の、この部会のテーマにもなっております。現状への対応策と予防的な対応策ということで、現状への対応策が3つございまして、困難を抱える若者の現状についての周知が必要。既存の若者支援事業の周知が必要。3つ目が広報のあり方も、若者が多く触れる媒体を活用するなど工夫の余地がある。また、右の予防的な対応策としましては、1番として、困難に陥る前に、予防知識を得る場が必要。2つ目として、地域で困難を有する若者が隠すことなく相談を受けられるよう支援意識を醸成する必要がある。こういったことが挙げられております。

続いて10ページの部会の指摘事項の2番ですけれども、若者やその保護者に対する相談体制等についての充実・強化についてです。これもやはり、本日のテーマになっていますが、現状への対応策としては、切れ目のない細やかな支援を行うために、総合的な支援窓口が必要。2つ目に、窓口職員の専門性を高めるとともに、ピア・カウンセリングなど豊富な支援メニューの提供が必要。3つ目が、メールを活用するなど、気軽に相談できる仕組みが必要。そして右隣、予防的な対応策としては、思春期以前から悩みを日常のかつ気軽に相談できる環境が必要という指摘を受けてございます。

最後、A3判で片三つ折になっている表がございまして、区の主な相談窓口ということで、区の行政組織が描かれたものです。

真ん中の私どもの子ども家庭部のほうで一例を挙げさせていただきますと、子ども家庭課、保育課、子ども園推進担当課、それから各子ども園があつて、男女共同参画課、それから児童館、学童クラブ等を担当している子ども総合センターといった部署で子ども家庭部は成り立っています。私ども子ども家庭課が所管するものは、家庭相談や、ひとり親相談、こういったものが入っております。ここでちょっと組織図を参考までに挙げて、若者も対象とした相談窓口がございましてということをお示しさせていただきました。

次に今日お配りしてある、パンフレット等について、簡単ではありますが御説明いたします。最初が「若者の自立支援の手引き」で、緑色の冊子になります。新宿区内の自立支援活動団体を紹介しております。今年の2月に発行されたものです。発行元の地域文化部消費者支援等担当課は、就労支援の関係を担当している部署でございまして、もともと労働行政と

というのは、区市町村レベルではやってございませんで、都道府県の仕事ですが、区のレベルでもこういった部署を設けまして、国の部局でありますところのハローワークともタイアップしながら、地域のNPO団体さんと連携をとりながらやっているところでございます。

その冊子がこちらの「若者の自立支援の手引き」で、心の自立、経済的な就労自立まで含めた一通りの内容が出ております。この資料の3ページ、4ページ目に、若者の仕事と心の相談室ということで、どんなときに利用できますか、それからカウンセリングについて、若者の一人ひとりの声と一緒に歩きます。それから、御家族のため息とともに御家族の新しい物語を探しますということで、若者当事者でも結構ですし、御家族の御相談もお受けいたします。右下のほうに、そのカウンセリングセンターさんの場所もご案内しております。

そのほか訪問支援もやっておりますし、不登校、ニート、ひきこもりの関係もやっておりますので、それぞれ活動団体の名称や活動内容をご紹介します。

続いて2番目が、「やすらぎとにぎわいのまち『新宿区』で働きたい方募集！」というチラシです。これは、地域企業就業支援事業ということで、区から事業者さんに委託して、支援事業を行っているというご案内です。40歳未満の求職者、40名参加者募集という形になっております。

続いて、3つ目が「悩みごと相談室」というブルーの2つ折りになっているリーフレットですけれども、子ども家庭部の男女共同参画課で発行した資料でございます。見開きになっておりまして、1人で悩まないで、ぜひ相談室に来ていただきたいというご案内です。相談に関しては、1時間を確保して面接対応いたします。それぞれ曜日、相談時間、連絡先が出てございます。

右ページにいきますと、相談員の先生方はソーシャルワーカーの方、弁護士の方、元家庭裁判所の調査官の方ですとか、いろいろな先生方が曜日ごとに対応していただいております。

続いて、昨年度の資料になりますが「20代～30代のためのコミュニケーション力アップ講座」ということで、同じく男女共同参画、ウィズ新宿の若者応援講座として出されたチラシでございます。コミュニケーションをはかるために自分はどんなタイプなのか、まず自分を知ろうということ。それから仲間がどういう人なのかを知ろうということ、取材をしよう。それから職場・プライベートでのアサーティブな対応ということで、初級編、中級編、上級編ということで分けて去年実施しました。

次が5番目の資料ですけれども、「知っておきたい、こころの病気」で、これは健康部で発行したものです。新宿メンタルヘルスクリニックの院長さん、都立中部総合精神保健福祉

センターの方に監修をしていただいています。

冊子になってございまして、目次を見ていただくと、精神疾患の患者数、統合失調症とは、うつ病とは、薬とリハビリ、ひきこもりとは、自殺と心の病気、精神障害者への誤解、相談窓口というような構成でできています。非常に文字も大きくて、簡潔にわかりやすく書かれている資料です。

最後のページのところには新宿区の相談先・通所施設マップということで、新宿の地図にそれぞれ相談する場所に番号が振ってございます。5カ所ございます。

続いて、6つ目の資料ですけれども、「教育相談のご案内」で、三つ折りになっております。これは教育委員会を出している資料です。なかなか学校に通えないお子様、不登校のお子様方を対象にした通所施設、相談施設になってございます。こちらには、元校長先生やスクールカウンセラーさんが、各種相談に応じています。

続いて、その中身をさらに詳しくしたものとして「つくし教室」です。つくし教室は、いろいろな理由で学校に行けない子どもに対し、一人ひとりの子どもにあわせて弾力的な指導を行って学校生活に復帰する意欲を高め、学校へ行けるように援助する教室です。開室日や時間は、基本的に月から金ということの週5日間で、9時半から午後3時までです。土日、祝日と12月29日から1月3日は休みです。指導者は、教育委員会が委嘱した教育経験者や教員免許を所持している指導員、元校長先生が当たります。

次が「新宿区子ども総合センター」ということで、同じくピンクの四つ折りの資料です。今年の4月に旧東戸山中学校の新宿ここ・から広場に立ち上がった施設の資料でございまして。あわせて子ども家庭支援センターのことも触れて書かれていますが、そちらで行っている子どもと家庭の総合相談事業、子どもの居場所、子どもショートステイ、一時保育、そういったものも盛り込まれております。

あと、今まで福祉部で所管しておりました障害をお持ちのお子様方のケアについても今年度から子ども総合センターに事業移管されて、障害幼児一時保育なども行っております。

最後が、ちょっと大きいA4の冊子になっております。新宿心と命のセーフティネット「困りごと・悩みごと相談窓口一覧」で、健康部が発行した冊子でございまして。1枚おめくりいただくと、目次が出てございまして、色別でそれぞれの問題別に分かれております。健康問題、経済問題、家庭・学校問題、勤労問題、また最後に家庭・学校問題ということで、こういった相談をお受けする場所が出ております。

さらに、ページをめくっていただくと、それぞれの相談窓口と内容と電話番号と受付時間

が全部網羅されており、様々な事業を行わせていただいています。

大変、雑駁でございますけれども、資料の御説明を終わりにさせていただきます。

#### ○福富部会長

ありがとうございました。

というのが、新宿の現状ですね。昨年度こちらの部会からの指摘として、広報啓発が十分ではないのではないかとということが部会員の一致した意見でした。実際に私たちが見学した時にも、こういう施設があるにもかかわらず知られていないんじゃないかという意見も、参加した委員の感想でした。

これから議題に入るんですけれども、どうでしょう、これだけやっていて、そしてこれだけパンフレットも用意されていて、この上何を啓発するのか。あるいは今までの啓発に、何か問題がなかったんだろうか、もう少し原点から考え直す必要があるようにも思えてならないんです。そのあたりどうでしょう、今、事務局から御説明いただいたことを受けとめて、まずは率直な感想というか、御意見を聞かせていただきたいと思います。

#### ○委員

基本的な質問ですが、その認知度というのは非常に問題ですが、実際問題としてこういった諸施設をどれだけの若者が利用されているのか、その推移みたいな統計データみたいなものは公開されているのですか。

#### ○事務局

部署によって、数字を拾っていると思います。現在は、手元にはありませんけれども。

#### ○委員

若者といっても、定義の問題が先ほど部会長からありましたが、非常に幅が広いですよ。そうすると、各年齢層によって、その抱える悩みというのは当然違ってくる。その辺の事例みたいなものがないと、どれだけの成果が挙げているのかが、既存の事業の中でも、ある事業はこれだけの成果があるけれども、また他方においてはさほど成果を挙げていない。その辺の状況というのは、この説明だけでは見えてこない。全体像が見えない限りは、ミクロ的にここはこうしたほうが良いという、そういう私どもでの提言はできないと思います。どういった人たちが、どのくらいの利用があるのかという年代別、相談別の統計データの公開が必要かなという印象を受けました。

## ○福富部会長

これは、可能な限り用意して、それぞれの事業に対してどのくらいの利用状況にあるのか、特に若者、当然これは若者を対象とした事業ですので、そのあたりの年代的なことも含めて、少し整理してください。

## ○事務局

そうですね、探してみます。

## ○福富部会長

ほかに。

## ○委員

この自殺者のところを見て、だんだん減っているとかアバウトなあれよりも、10代の1人、この1人は重いんじゃないかなと。統計がどうと言うよりも、一人ひとりの中に大きな問題があり、このようにいっぱい相談先があったとしても、信頼できる方がいなかったら相談もしないでしょうし、ひきこもり、不登校も、何でもここに行ったら安心していい場所みたいなものがない限り、なかなか難しいと思うんです。とにかく私は自殺にまでいかない方法を、よく考えなければいけないんじゃないかと思う。区の方の情報として出してくださったことにすごく感謝しますが、これを見ながらすごくそのことを思いました。

## ○福富部会長

もちろん、そうだと思います。もちろんその背景はそれぞれ一人ひとりが重いんだろうと思いますし、20代の13名ですか、その13通りの事情があり、その中身的なものはプライバシーの問題にかかわるので、そう表に出すわけにもいかないと思いますが、おっしゃるとおりだと思います。

次の7ページですか、これは質問の文言に、ちょっと誤解もあったのかなという気がしてはいますけれども、近所づきあいの中で、いざというときに相談できる人がいないというのが、10代、20代、30代、ですか、一番多いんですね。ただ、これは近所づきあいの中でと限定しているから、多くなったと捉えることもできますが、何か心の問題とか、困ったときに相談できる人が身近にいるかいないかは、大変重要な問題だと思うんです。そのあたりの問題を含めて人間関係、家族、あるいは地域で、相談というか、気軽に何か話せるような状況が、特に都会の中で今、非常に欠落している状況があるように思うんです。

## ○委員

そのことで、ちょっと私も質問したかったんですけども、7ページで10歳代・20歳代が、⑤で医療費や介護にかかる費用が大きな負担となることを挙げています。これは自分の家庭を見ていて、両親が医療費とか介護費用で困って、心を痛めている子どもの姿みたいなのが、こういう答えとして出ているのかなと。私が10歳代・20歳代であったら、うちの医療費とか介護にかかる費用が大きな負担となっていることがストレートに答えとして出ない気がする。何かそういうのもあるんで、やっぱり設問と答えが何かちょっと。

## ○福富部会長

この手の質問というのは、一番大事なの一義性といって、聞きたいこと以外は文言の中に含まれていないという、ワーディングのチェックが必要だと思うんですが、どう解釈していいか非常に迷うような質問があると思います。でも、そこを差し引いて何か考える。

## ○委員

多分これは、10代、20代、30代だけではなくて、50代、60代の方の意見も比べてみないとわからなくて、多分14.1%なので低いと思うんです。それでも、14.1%もいるという捉え方もあると思うのですが、若者は例えば50代、60代と比べると、多分多くても30%しか丸をつけない。そういう中で5位まで拾うと、5位にこれが入っていたという可能性もあるかなと思います。

## ○福富部会長

だとすると、親のことというよりも、今メディア等々で伝えられていることを漏れ聞いている若者自身が、自分が大きくなったときに負担になっちゃうのではないかという意見かもしれないですよ。

## ○委員

割と、そういう将来の自分って、漠然と不安に思っている子たちは結構います。

## ○福富部会長

いるんですよ。

かなり今メディアは、その辺を言っているじゃないですか。高齢社会になって、今の若者は年金ももらえないとか、そういう影響もあるんじゃないかなと思います。

## ○委員

ひきこもりの推計ですが、この回答が5,000人に対して65.7%ですね。その中でこの推計を出したと思うんですが、本当にひきこもっている人は、多分回答しなかったんじゃないか

と思うんです。するとこの数というのは、ちょっと変わってくるのかなという気がするんです。どうなんでしょうか。多分、この回答しなかった人の中にひきこもりが多いんじゃないのかなという気はするんですが。

#### ○福富部会長

これは、かなり大規模な調査で、回収率がどのくらいあるかにもよりますよね。書いてありますか。

#### ○委員

65.7%の回答を得たと、書いてあります。

#### ○委員

65.7%なので、そんなに低くはないと思います。でも、おっしゃるように、自分にとって都合の悪いことは答えたくないの、実際はもうちょっと多くなる可能性もあると思います。

#### ○委員

私も、こういう話を出すと、結構近所にいますという方が多いので、現実としていつも考えさせられます。

#### ○委員

先ほどの、充実したこれらのパンフレットは、具体的にどういう場所に置かれているのかなと思って。というのも、保護者がいなくなってしまった成人から後は、特に地域とのつながりも薄くなりますし、もしこれが区役所とかそういう施設にあっても、若者はそういう所に寄りつかないと思います。例えばインターネットで特別なサイトがあって悩み相談で検索すると、見つかるといいかなと思いました。

#### ○事務局

この資料は、御指摘のとおりで、行政の施設を中心に置いています。例えば、この資料の中で、子どもに関する総合相談ですとか、子ども家庭支援センターのリーフレットなどは、子育て家庭の親御さんですとか、小中学生のお子さんたちが普段通われている児童館とか、放課後子どもひろば、学校ですとか、行きやすい場所には置いてあります。しかし、ひきこもりの関係とか若者の自立支援となってくると、出ない方に対してどうかという、紙ベースのリーフレットを手にする人が入手しやすい状況にはなっていないと思います。ということで、今言った別の媒体を使って情報提供、例えばホームページに載せれば、ひきこもりだったとしてもインターネットで家の中で見て、ああ、こんなことやっているのかというアクセスの可能性が出てくると思います。

## ○委員

多分やっぺらっぺらと思えますけれども、そこまでたどりつかない人が多いかなと思って。特に、そういう施設とか、区とか、大人とか、社会とかが、もう嫌ってなったり、できるだけそういう所とかかわりたくないというのが若者的な心理だと思うので、難しいなと思います。でも、だれか周りの大人が知っていれば、ちょっと話題として提供したり、さりげなく差し出すこともできると思うので、とてもよいと思うんですが、ダイレクトに行くためには何か別な案があってもいいのかなと思います。

## ○事務局

はい、ありがとうございます。

## ○福富部会長

どうでしょうね、今の問題ですけれども、今までの発想の中に、こういうものを作って、それで終わってしまっている。従来だと何か情報を与えて、そういうものがあれば、それでいいんだという発想だったように思う。例えば今1つ出てきたのは、周りの大人にそれを知らしめるということで間接的に援助する。そういう対応もあるではなかろうかと考えていくと、従来方のアクセスというか、そういうものとは違った形の何かがあるのかもしれない。これはちょっと考えてみる価値があるようなテーマだと思うんですね。これは、少し温存しておきたいと思います。

## ○委員

多分、先生の言われたことと重複するんですが、情報へのアクセスは確かに重要です。今のネット社会の中で、若者はかなりネット依存症に近い状況にあるんです。まず、携帯の普及率を見てもそうですし、高校生の100%近くが携帯を持っています。それから、パソコン自体も各家庭に、1台あるような普及率ですから、そういうユビキタス社会の中で、彼らというのはネット依存型になっています。

これは何の解決策にもならない、あくまで感想として聞いて欲しいのですが、例えばネットを通しての相談体制に仮にしたとしても、メールという狭い枠組みの中で顔が見えない同士が本当に心を割って相談できるのかという、フェイス・トゥ・フェイスという部分において私は非常に疑問を感じるんです。

人間関係がこれだけ希薄な社会になってきているのは、人と人が顔と顔を向き合う、そういう場面が非常に少ない。自販機に行けば、お金を入れれば物が出る、コンビニでも何の会話もなく、物を出して、バーコードを通して、お金を払う、あるいはカードをかざしてそれ

で終わりと、そういう中にコミュニケーションは全くない。これは新宿区の問題じゃなくて、日本社会全体の問題なのでしょうけれども、そういうフェイス・トゥ・フェイスがどんどん少なくなる社会の中で、本当にネットを通しての情報アクセスは可能だけれども、それを通しての相談体制がどれほどの効果を奏するのかは、私は甚だ疑問ですね。

先ほどの委員から指摘があったように、こういう情報へアクセスできない若者も確かにいると思うんです。ですから、そのアクセスをいかにスムーズにして、メールだけの相談とか、ネットだけに依存しない何かを、そのすべを考えなければいけないなど、あくまで感想の域で申しわけないんですけれども。

### ○福富部会長

そうだと思います。だから、去年もずっと1年間いろいろ考えてきたけれども、ある枠は抜け出すことができてなかった。今年はそれを抜け出して、どれほど実現可能性があるかは次の問題にして、何か従来型の枠組みとは違った発想をしない限り難しい。大体30代後半まで若者に入れるという発想が、従来の発想になかったわけですから、そういう発想それ自身も少し変えるということが必要かなと。どうぞ、皆さん頭を柔軟にして考えてください。

### ○委員

今、言われたことで、考え方をもう少し柔軟にしてほしかったと思うのは、携帯電話が飛躍的にすごいことになっていくだろうということは、今ここで言うこともないんだけど、今のようなフェイス・トゥ・フェイスなんて状況じゃだめなんですよ。世の中はとにかくすごいスピードで進んでいますので。

### ○委員

例えばコミュニケーションスキルの問題というのも、この後のテーマになってくると思うんです。コミュニケーションスキルがない、ある程度低下しているというのは、そういった情報媒体が発達した側面もあるわけですし。機械を通して人間と人間がメールという文字のコミュニケーションしかない中で、人間の心と心のコミュニケーションスキルというのは、向上していくのでしょうか。

### ○委員

そう。まさにそういうことも考えつつ、今のネット社会ということも大きな視野に入れないと、ギャップがすごく大きくなるということ。あと、別な観点から言うと、先ほどコミュニケーション力アップ講座がありましたけれども、コズミックセンターでも同じような講座を開いているんです。これは、何のための講座かということ、指導する者側のコミュニケーシ

ョン力アップ講座を開いていて参加者が多かった。ご紹介のあった講座は、まさに20代、30代の方に、ぜひ来てくださいと。先ほど数字をどなたかが言っていましたけれども、去年、この講座に参加した数も、僕も教えていただきたいと思います。要するに、20代の方が何人、30代の方が何人、これは正直言って余り集まらなかったんじゃないかなと思うんです。

#### ○委員

私は、電話相談をやっています。そうすると匿名だからお話できることがすごくあって、本当に困ったことって、面と向かってお話しできない方が多いんです。だから、本当に困ったときに全然知らない人に、本当の自分の心を知ってほしいというのがあるので、それも一つの方法です。また、面と向かわないと言えないこともあるし、具体的な相談になったらそうなるんですけども、やっぱりそういう面もあるんじゃないかなというのは感じました。

それと、コミュニケーションって10代になって初めてできるものじゃなくて、小さいときからコミュニケーションができないからできないんじゃないかと思います。小さいうちから、コミュニケーションというわけではなくて無駄話でいいと思うんですけども、何でも自分のことを話す機会を作って育てていかないと、コミュニケーションってできないんじゃないかなと思います。

ここは15歳からというデータになっていますけれども、もっと小さいとき、小学校とか中学校のときからやっていないと、なかなか人とのつき合いとか心配事を本当に話せるようにならないかなと、見て感じました。

#### ○福富部会長

先ほどの議論というのは、非常に象徴的というか、非常に問題の核心なのかもしれない。要するに、現代社会の中でコミュニケーションって一体どういう意味か。ある意味ではかわらなくてもいいような時代を、一方において作っているわけです。その中で、何か問題が出てきた。じゃ、その社会のありようとコミュニケーションを考えたときに、原点に立ったフェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションが本当に必要なのか、あるいはそれが欠落しているから問題が起こっていると考えるか、その問題に行きつくと思うんです。そういう意味では、この部会としての象徴的なやりとりかなと聞いていましたが、いかがでしょうか。

#### ○委員

今、中学校で活動をさせていただいていますが、お話をずっと聞いていて、幼稚園、保育園、小学校、いろいろなことが充実してきて、まず一人っ子がすごくふえてきているということ。それから働く御両親が多くなってきているということ。それからひとり親の家庭も増

えてきている。そうなってくると子どもは、家の中で1人でしかいない。保育園とか児童館とかは、以前は6時で終わり、1人でおうちに帰りなさい。それが今では7時までとサービスがよくなった。ある日、子どもと帰ってきたときに、その子が「7時になってよかった。今までは6時から7時まで1人だったの。」と言う。そういうお子さんとか家庭がすごく増えてきている。そういう子たちって喋りたくて、喋りたくてしょうがないんです。だから、他人の人とか先生にまわりついたりとかする。だから今、15歳とか20歳とか、そういう方たちがひきこもりになるということになっているんですけども、やはり幼少期のことが一番大きいのではないかなと思っています。

あと、先ほどのパンフレットとかリーフレットなども、1人で外に出向きたいと思う場所と考えると、図書館とかに置いてもいいのかな。ちょっと1人になる時間に、そういうのがあると、手に取りやすいかなと思いました。

#### ○委員

私も考えて、ずっと聞いていたんですけども、ひきこもりでおうちにいる子どもというのは、その家族の人みんなひきこもり状態というか、そのことに対して外に発信したくない状況で生活をしているわけなんです。だから、私も身近な人に手を差し伸べようと思うんですけども、シャットアウトされてしまいました。何とかその状況を打破しようと家族じゅうにアプローチするんですけども、なかなかそれが難しくて。本当に何年もかかっているんですが、面接に去年行かせていただいた子から、相談窓口の面接に行ってくださいと言ったんですけども、すぐに断っていたりして、いろいろ皆さん考えておっしゃってくださっているけど。

そのうちは、最初1人がひきこもりだったそうだったんです。それが2人になってしまった。やはり子どもで。生活自体を外から見ると何でもありません、きちっと生活しているし、食べる物はちゃんとある。

言いたいことの半分も言えないんですけども。

#### ○福富部会長

ただ、その場合ひきこもっている若者をターゲットにするというのが、多くの従来型の発想だったけれども、その前に家族を少し支えよう。だから、そうすることも一つの発想の転換ですよ。

## ○委員

昨年度の協議会でも話が出ましたが、ひきこもっている本人は、とても幸せという話がありました。満足している子が多くて、しかし家族は悩んでいる。それと、今だんだん出てきているのは、小学校の時期からひきこもって不登校とか始まって、虐待だったのが、だんだん親を虐待するようになってきていて、そこが問題だと。ただ、親の年齢が上がって高齢になってくるとその先行きが不安だということで、それが悩みなので何とかしてほしいという話でした。だから、今おっしゃったように、周りからも援助しなくちゃいけない。

## ○委員

やっぱりひきこもりしている人自体は、自分がひきこもりというのがわからないんです。僕のところに相談に来る方は、先ほどの方が言ったように、自分は何でもなく、それがいいと思っているし、周りが悪いと思っている。そういう人たちにあなたが悪いんですよと、いうのはなかなか言えない。だけど、それを抱えている家族の人たちは実際にわかっているので、家族の方を交えて、どんな問題で、課題で悩んでいるのか、どういう方向に進んだらいいのかというのは実際にやった人じゃないとわからない。

## ○福富部会長

確かに、ひきこもりの本人がいて、その家族がいる。その家族の周囲にまた地域がある。地域の先には社会がある。どこの何が問題かと考えていきますと、本当にここだけが問題ではなくて、家族が問題、いや家族を見ている地域が問題なのかもしれない。あるいはその地域を抱えている社会全体の問題、いろいろレベル、階層がある。

その中で、さっき言いかけたのは、この部会はあくまでもひきこもりの対応策を考える場ではなくて、行政としてそのような若者の問題をどのように考えることができるかという見地で、これからもう少し議論を進めたい。そのために原点の問題を考えるということは、大事なことです。先ほどのコミュニケーションのありようも、そういう意味ではいいんですけども、ただ、ここの最終的な目的はあくまでも行政として、若者支援という形で何ができるかということ提言するということだけは、ちょっと頭に置いておいてください。今日は第1回目ですから、どうぞ思っていることを何でも。

## ○委員

肉の嫌いな人に魚を食べさせるのと同じで、その人が望んでいるものがあると思うんです。嫌いなものを食べなくても生きていけるし、人とコミュニケーションを持たなくても生きていける時代ですので、必要がない人に無理やり治してあげるとか、どうなのというのも余計

なお節介と思う人もいるだろう。

#### ○福富部会長

ひきこもっている人が、それを支えてくれる、生きられるような家族があるからいいんですよね。その家族だって恐らく亡くなっちゃうわけでしょう。すると、その人が残ったときの社会はどうなっているかわかりませんが、そこを考えるとどうですかね。

#### ○委員

新宿区というエリアに焦点を絞って考えた場合、資料を見ていくと、世帯人員の状況という3ページの表にも出ていますように、1人世帯は、20代から39までの年齢層で、ここが非常に多いわけです。青年期とっていいのかわからないんですが、このくらいの年齢になれば社会に交わりたい、社会参加したい、どこかの集団、グループに所属したいという帰属意識というのが当然出てくると思うんです。

確かに、パラサイト・シングルの家族のいる方だったら、そういうアドバイスも家族は取り入れて、家族の方も含めた支援事業というのも可能だと思うんですけども、1人世帯に対する支援となると、これは先ほど私が申し上げた情報アクセスの問題、それから先ほどご指摘があったように、自分がひきこもりという認識さえ持たない人が当然いるわけです。

ですから、行政としてそこにピンポイントで、いかにそういう人たちを救い上げていくか、その辺が大きな課題になってくると思うんです。

#### ○委員

私も、ちょうど1人世帯が多い新宿区というのは同じように思っていたところで、例えば1人世帯のうち、ほとんどの方は何らかの形で就労しているんでしょうか。

#### ○事務局

住民基本台帳からの統計なので、就労されているか無業の方かまでは出ていません。

#### ○委員

もし1人世帯であるとするなら、勝手な考えですけども、20代、30代で新宿区に住んでいて、1人で何とか、あるいは豊かでもいいんですけども生活している。そういう方の中に自殺者とかもいるわけですね。それで、さらに近所には誰も相談できる人がいなくて困っている方もいるとするなら、ひきこもりということも、家族が支えるひきこもりもあるかもしれないんですけども、そういう新宿区の中で非常に孤独に思っている人が、どこかちょっと相談できるような場所に、もう少し届くと、かなりいいんじゃないかなと。多分、地域で何かかかわりたいとか、つながりたいということもあると思うんですけども、どうしたら

いいかわからないし、自分は1人で仕事して帰ってくるだけだしというときに、何かかわかれるような、目にできるようなものがあるといいかなと思います。

#### ○福富部会長

素朴な疑問です。単身家族、1人暮らしの場合のひきこもりということは、どういう状態をイメージするんですか。

#### ○委員

ひきこもりじゃないイメージで、仕事をしているというイメージです。

#### ○福富部会長

1人暮らしの若者、例えば35歳で1人暮らししている。家から出て仕事に行く、これは、ひきこもりじゃないですね。単身1人暮らしのひきこもりというのは、あり得ない。あり得るとすれば、すごい大金持ちで、働く必要がなくて、ただ1人のマンションにこもってしまって何もしないという状況、要するに、社会とかかわることができないような人がいる。これはかなり重症だと思うんです。そうすると、いわゆるひきこもりというのは家族の中の問題であって、単身の場合の問題とまた違った問題なのか、それはひきこもりのカテゴリーに入れて考えられるのか、その辺はどうでしょうか。

#### ○委員

私が今思ったのは、正規従業員の方の割合は非常に少なく、非正規雇用が多いということ。それは、フリーターの方も含めてですが。そうすると、例えば、自分は会社という時間、9時～5時という時間制約の中では職場との人間関係は保っているけれども、それを過ぎたすべての時間は人とかわりたくない、それ以外は自分自身の世界の中で趣味の世界に興じたりとか、つまり、生活をつなげるための手段として仕事に行って、例えば5時過ぎて飲み会に誘われても断ったりとか、職場の部署以外のかかわりあいは一切持ちたくないといった場合は、ひきこもりとしての定義になるのかなと、一瞬思ったんですが。

#### ○福富部会長

要するに、職場という、社会との接点があるわけでしょう。だから、それはひきこもりではないんじゃないか。

それと、もう一つは仕事との関係で、かつてはフリーターの問題が社会問題になったのは、自分の意思でフリーターだった。ところが、今やフリーターを余儀なくされている若者たち、要するに景気が悪くて正規雇用を得られないために、フリーターせざるを得ない人々もいます。だから、いろいろな就業形態にいる若者について、これはひきこもりとは切り離して、

そうしないと職場の中での位置づけの問題が出てくる。

そうすると、ひきこもりというのは家族という枠の中でしか考えざるを得ないのかなという気がするんですけども、どうでしょう。やっぱり違っていませんか。

**○委員**

例えば、秋葉原の事件、しばらく働いていてお金を持っていて、無職になって、寮も追い出されてしまって、しばらくの間うちで仕事をしないているみたいな時間はなかったですか。

**○福富部会長**

それは、だからひきこもりです。1人暮らしであっても、数カ月間社会と一切接点がなく蓄えた金で暮らしているというのは、それはひきこもりでいいんじゃないですか。

**○委員**

だから、ひきこもりという言葉ではない問題なので、何がひきこもりかというのはちょっと難しいので、こういう人たちをどう助けるかという、いろんなタイプを出していってもいいかもしれません。

**○委員**

そうすると、医療的な処置が必要なのですかね。病気ですか。

**○委員**

精神的な病気の方もいらっしゃいます。

**○福富部会長**

そういう人は、当然いるでしょうね。

**○委員**

病気の場合は、心の病気だから、一応病気の中に入る。

**○福富部会長**

だから、ひきこもりと言われている若者の中に、いわゆる精神的な疾患としてネーミングされる人もいるでしょうし。

**○委員**

だから、病気があると生活保護も1人世帯でもらえることがありますね。

**○福富部会長**

だから単身で、ずっと仕事をしていたけれども職場を首になったとか、やめてしまって家にひきこもる。そして、実家にも行かないし、親戚づきあいもない、友達との関係もない。ただひたすら家にこもって暮らしている、生活は近くのコンビニで食事をするだけという状

態だと、そこは単身のひきこもりなんだと思います。

## ○委員

非常にゆゆしき問題として私が感じたのは、この資料の6ページ、7ページに関連するんですが、非常にフリーターの中の30代の比率が年々高くなっているという子ども・若者白書の指摘と、それから無業者の割合が30代から非常に増えてきている傾向にある指摘を踏まえると、7ページの心配事のランキング、30歳代の2番、4番、5番というのを私ちょっとピックアップします。2、4、5というのは、これは仕事に関する内容になってくるんですね。暮らしに十分な収入というのは、当然仕事です。これと就職先が見つからない。それからリストラ、廃業ということ。この3つを合わせると56.2%にもなるという、この数字は30歳代で仕事に関する悩みを6割ぐらいの方が持っていらっしゃると。10代、20代の方でも、暮らしに十分な収入を確保できないという3番目ですが、就職先が見つからないと、これを足しても51.1%の過半数になるという、つまり、これは10代から30代の若者の50%以上が就職というか、仕事に関する悩みを持っていらっしゃるんです。

これに対して、その前のページの自殺者の数等の推移を見ると、必ずしも無関係ではない気がするんです。30代というのは、年々増加傾向を示しているということ、20代も同様の傾向がある。そうすると、20代、30代の共通の悩み、心配事の上位を見ると、仕事に関する内容なんですね。すると、区の支援のウエートとしては、いろいろな課題に対する悩みに対応しなければいけません、優先順位といいますか、それを考えると、やっぱり就労なのかなという気がします。

それは、私が先ほど申し上げた、いわば社会とのつながりというか、この時期というのは当然、自己実現要求が一番高まる時期なので、社会との接点を見出したいけれども見出せない。だから、社会参加とかも含めて、若者の30代を中心とする社会参加支援対策にウエートを置いていったほうが良いという気がします。

## ○委員

確かに、就労支援が一番大切だと思います。話しが違うかもしれませんが、犯罪の再犯率が多いのは、就労していない人が多いんです。ですから、仕事があれば犯罪がなくなる。犯罪というのは、予防が一番です。

その予防となると、またひきこもりに戻るんですが、どういうふうに予防できるか、やはり幼児期の教育だとか家庭の教育だとかになっちゃうので、堂々めぐりしちゃってどうしようもなくなっちゃうんです。

### ○福富部会長

去年、部会で視察に行った新宿若者サポートステーションも、基本的には就労支援ですね。

### ○委員

就労支援でした。

### ○福富部会長

就労に耐えられるような心の問題、それをどう養っていくかという支援でしたね。

### ○委員

そうです。少しできるようになったらお掃除をして、それからクリーニング屋さんのお手伝いをするとか、何か少しずつみんなでしたりするとか。

### ○福富部会長

すごく就労支援というのは難しいわけですし、職につかせるというのは、ただ職業あつせんではなくて、職ができるような人をつくらなければいけない。仕事についたけれども、ここでうまく適応できないという若者たちが今、非常に増えてきた。それはいろいろな原因がある。コミュニケーション能力もそうだし、社会的なスキルも、そういう若者たちが育っちゃっている。だから、予防的に言うと、幼稚園、小学校からそういう子どもたちを本当は育てて

いかなければいけないんだけど、実はそういう子どもたちに育てていない若者が育っちゃっている。これは、非常に大きな問題です。だから、戦後の教育というのは、これだけすばらしいことをやってきたはずなんだけれども、結果的に見ると困難を抱える若者をつくってきた部分もあると。その部分というのは何か教育の基本的な理念というか、そういうものをどうするかですね。

### ○委員

就労支援で言えば、新宿区の第二分庁舎で、ハローワーク新宿とタイアップして、若者に限らず、もっと地域というか、基礎自治体と寄り添った形で就労支援しましょうという動きが出てきている。だから、これもだんだん変わってくると思うので、その状況を少し見定めないと、結果が出るのは半年、1年先だろうという気がします。

### ○委員

学卒で就業したけれども、高度になったために30代後半から40代にかけてリストラというか、労働能力の検定があつて、初期の誰でもできる仕事はもっと若い人にやらせなさい、お給料の高い人はもっと違うことをというので、それでリストラされる人がすごく多くなって、

2人ばかり身近な相談を受けたんです。そうすると、技術もなかったりすると、私は本当にこのまま一生懸命やってきたけれども、生きるすべがないみたいに、陥っちゃったことがあって、だから、それは本当に行政だけじゃなくて民間の問題でもあると思うんです。会社自体の問題でもあるし、1つの企業で一生勤められなくなってしまった今の世の中はどうしたらいいか若い人は本当に悩んでいて、すごく大変だなと感じています。

## ○委員

本当にいろんなタイプの人がいると思うんですけれども、私が聞いたハローワークに行った方ですと、向こうは紹介することが仕事なので紹介してくれるんだけど、じゃ、その先どうしたらいいかとか、そういうところまでは全然手が回っていないので、何か非常に行きにくいということも聞きました。ですので、お話を聞いて、いろいろなサポートがあるので、サポート間のつながりがあるといいなと感じています。

あと、いろいろなタイプの若者がいると思うんですけれども、私が聞いたのは元受刑者で、出てきて、紹介してもらった仕事が、非常に自分の本意ではない、安い賃金で、大変で、自分はそんな人間じゃないからやりたくないと言ってすぐやめてしまうので、紹介している人の話だったんですが、とても困ってしまうという話も聞きました。

だから、どこからそれを直していくのかわからないですけれども、いろいろな教育とか過去の心の問題というのも含めて、そこを何とかしないといけないので、難しい問題がたくさんあるなと感じます。

## ○福富部会長

すごく議論が、いい方向に僕は進んでいるのだと思えるんです。というのは、次のテーマ、これまで行政がいろいろなものをやってきた、でも、その間をつなぐ全体のネットワークなり、そういうものが欠落しているじゃないかということ。それも、今のお話を伺えば、単にコミュニケーションするだけではなくて、ドッキングしたときに新しいものが生まれることもあり得る、そこまで含めて、次回の部会は、ネットワークづくり、連携の問題と考えています。

## ○委員

今、先生が御指摘された、この連携というのは当然必要でして、ひきこもりと言ってもいろいろなレベルがあると思うんです。極度のひきこもりであったり、軽度のひきこもりであったり。それから、リストラにあった方の中にはいろいろな理由で、そういった目に遭われた方も多いと思うんです。その、スキルをアップしていかなければいけないと思っている方の中にはいらっしやると思うんです。ビジネススキルを上げたいんだけど、どうしたら

いいかわからない。ひきこもりなんだけれども、社会と交わりたいんだけれども、どうしていいかわからない。

私は、この資料に目を通して思ったのは、コミュニケーションスキルの若者支援講座と、これは就労支援の委託事業だと思いますけれども、これらを連携、強化してやっていくことが必要ではないかと思うわけです。スキルアップというのは、ひきこもりをある程度予防していく上での、ワークショップであったり、講演だったりすると思うんですけども、そういう、ひきこもりを少しでも減らすための、人間としてのコミュニケーション力をアップするためのこの講座と、就労支援の委託事業、これをいかにドッキングさせて、これをいかに拡大整備していくか、その辺が何か新宿における若者就労支援、それから社会参加づくりの大きな鍵になってくるのかなと思います。

#### ○福富部会長

その場合のドッキングとは何なのか、どう一緒にするのか、足して2で割ればいいのかという問題ではないと思うので、それに対して行政が一体何ができるだろうかという問題に発展していけるんだろうと思うんです。これとこれだけではなくて、ほかのいろいろなものがあるだろうし、それらをもう一度見つめ直したときに、もう少し何か議論が出てくると。理論ではない、もう少し具体性を持った提言につながるようになるかなと期待をしています。

#### ○委員

犯罪者の就労支援のときに、区とハローワークと福祉、要するに生活保護、そこの3者が一緒になった協議会があって、それに参加したことがあるんです。しかし、仕事がありますだけではなかなか就業に結びつかない。病気があったり、学力も低下していたり、いろいろするので、そこら辺のフォローを協力、連携しながら就労支援しようということがありました。やっぱり連携というのはすごく大事なことで、これがありますだけではなかなか就職には通じないなというのは思いました。

それから、戦後の教育というのを部会長はよく言われますけれども、これについても、みんなでもう少し話し合いをしながら、よくできる人はうまくいっているでしょうけれども、そうでない人は、もう一回やり直しても大丈夫だなという何か幅広い受け皿があるほうが、エリートの仕事でなくてもいいんだよというふうな、何かそういう安心して新宿で住めるような何かがあるといいんじゃないかなと思いました。

#### ○福富部会長

以前だって、教育の中で落ちこぼれていた子というのは常にいたわけです。でも、その子

だって社会の中で生きられる社会の柔構造、柔らかさがあった。それが社会自身が、ある意味でリジッドになってきて、ある能力が、あるレベルがないと社会全体の中でうまく生きていけない社会になってきているのかもしれない。だから、格差がどんどん生まれていっちゃっているという状況がありますよね。

だから、子ども・若者育成支援推進法をつくって、その中で若者について行政が協議会とか、その地域で考えなさいよと。新宿は地域としても、全国に何か発信できるような、そういう地域だと思うんです。ここで何か新しい全国に向けて若者支援の地域行政が担える役割、あるいはその指摘がもし発信できたら、全国的にも影響力を持ち得るんだろうと思います。

そんな意味で、この部会、あるいはこの次世代育成協議会は、社会的にも非常にやりがいのある、考えがいがある部会だと思います。限られた回数の中で、非常に難しいとは思いますが、どうぞ皆さん、なるべく意見をいただきたい。

それでは、次回の日程について事務局から。

## 5 その他事務連絡

### ○事務局

次回の日程の前に、先ほど議論の中で、20代から30代のためのコミュニケーション力アップ講座、これだけ実績がわかっていましたので御報告させていただきます。

こちらの行事は、ここに掲げているとおり20代から30代の方を対象にして、原則として3回とも参加できる方で、30名先着順で応募しました。初級編は33人とオーバーしましたが、33人受け入れました。2つ目の中級編は27人、3回目が27人ということで、大変多い参加がありました。なおかつ女性の比率が6割、男性の比率が4割という形でした。

### ○福富部会長

3回というのは、初級、中級、上級で3回ということですね。

### ○事務局

そういう意味です、はい。

それと、次回の部会ですけれども、9月2日金曜日、時間は1時半から3時半で、時間は一緒です。場所が変わりまして、新宿ここ・から広場の仕事センター5階、「あんだんて」を会場にいたします。直接集合で、お願いいたします。

## 6 閉会

午後 3時32分閉会